市政だより No.508
題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです

太宰府

1992 12.1

■毎月２回／1・15日発行　■編集／福岡県太宰府市総務部企画課　TEL (092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財 ㊶

推定金光寺跡（史跡観世音寺境内及び子院跡）

鎌倉・室町時代

観世音寺の裏から四王寺山の方へ上っていくと観世団地の家々が並んでいます。その団地の奥、四王寺山の裾野に推定金光寺跡があります。

観世音寺は中世、四十九の子院（付属の寺）があったと伝えられ、その一つに金光寺があります。現在遺跡がある所は、小字今光寺と呼ばれ、音が同じところから子院金光寺の有力な候補地でした。近年の発掘調査により、その一帯からは十三世紀後半から十六世紀前半にわたる建物跡や石塔群が見つかりました。

そして大きく三つの時期に分かれる遺跡からは、中国や遠くベトナムで焼かれた陶磁器や、火鉢、漆の椀や皿、櫛、下駄などの生活用具がいろいろ出土しています。他に土製のお地蔵様や銅製の懸仏、仏像の宝冠、猿を描いた守護札など、仏教関係の品々も出てきました。

ではこの遺跡は金光寺跡なのでしょうか。実はまだ結論が出ていないのです。出土品に仏教関係のものが多いし、地名がコンコウジですからその可能性は強いのですが、一つの子院と考えると建物の数が多く、また、寺というよりは武士の館と考えた方がふさわしいような出土品もあることから、現在のところ金光寺跡だと決めていないのです。それで、遺跡の名に「推定」が付けてあるのです。

市政だより No.510
題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです

太宰府

1993 1.1

■毎月2回／1・15日発行 ■編集／福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財 ⑫

イスラム陶器

十世紀ごろ
太宰府市内

月の砂漠をはるばる越えたペルシアには瑠璃の色がよく似合う。ペルシアンブルーと呼ばれる目の醒めるような青が、神殿を飾り、王城の門を染めた。そんなペルシアをほうふつとさせる瑠璃色の陶器が太宰府からも見つかります。（写真上）

胎土が軟らかいので、小さな破片しか出土しませんが、元の形は写真下のような高さ七十八センチの大壺だと考えられています。

イスラム陶器とは、現在のパキスタンからトルコ、エジプトにかけての地域で九世紀ごろから焼かれ始めた陶器で、中国の陶磁器とも、ヨーロッパのそれとも違うイスラム世界独自の様式でした。

ただ、太宰府出土のこの壺は、典型的なイスラム様式ではなく、前代のササン朝ペルシアの焼物の流れを引いています。同様の陶片は、国内では他に鴻臚館跡や久留米市の筑後国府跡など九遺跡で出土しています。

またアフリカ、インド、東南アジア、中国からもこれらのイスラム陶器が見つかっており、広範囲に交易が行われていたことを物語っています。

日本へ運ばれた壺は直接イスラムの人が持って来たのでしょうか、それとも中国商人を介してでしょうか。そして、壺そのものが貿易品だったのか、壺の中に入れられた物が重要だったのか。深いブルーの陶片を眺めていると、様々な思いが広がります。

奈良オリエント館所蔵イスラム陶器
（伝イラン、ビシャプール出土）

市政だより No. 511
題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです
太宰府
1993 2.1
■毎月２回／1・15日発行 ■編集／福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財 ⑨③

金銅製菩薩立像

像高一〇・五チセン
大字内山字南谷出土

市の東北にそびえる宝満山は神が宿る山として、昔から祈りの場でした。そのため、山中はもちろん広く山麓一帯にまで遺跡が広がり、時代も古代から江戸時代まで長い期間に及んでいます。今回取り上げたこの仏像も、その宝満山の歴史の一コマを物語るものです。

さて、この仏像は昭和六十一年に宝満山麓の南谷で、九州電力の高圧線鉄塔建設工事に伴う発掘調査で出土しました。土中に埋まっていたため錆がひどく、詳細はわかりませんが、金銅製の菩薩像で七～八世紀の白鳳時代に作られたと考えられています。

ではなぜ、金銅仏がこのような所に埋まっていたのでしょうか。残念ながら出土の状態からは理由がつかめないのですが、今までの宝満山の歴史から考えると次のようなことが想像されます。

一つは、金銅仏が山岳修験の地に目立つということ。奈良県の金峯山や石川県の白山など修験道が盛んな所から金銅仏が多く見つかっています。宝満山も修験道が盛んでした。

もう一つは経塚に関係したものかもしれないとの推測です。宝満山周辺では、今まで多くの経塚が発見されており、中には仏像を伴った経筒（昭和六十二年六月一日号参照）も出土しています。仏像を伴うというのは他地域でも例があり、可能性は考えられます。

現在までの調査では、それ以上のことは、はっきりしませんが、さまざまな歴史を秘めた宝満山は、これから私たちにどんな過去を見せてくれるのでしょうか。

市政だより No. 513
題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです

太宰府

1993 3.1

■毎月２回／1・15日発行　■編集／福岡県太宰府市総務部企画課　TEL (092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財 ⑭

有智山城跡　大字内山

内山と北谷の間に、南谷九重原と呼ばれる谷が一つあります。現在、人家はありませんが、田んぼがかなり広がっています。そして目の前に四王寺山、遠くに脊振の山々が連なり、太宰府市街はもとより志賀島まで眺めることができます。

その九重原一帯に昔、山城が造られていました。有智山城といい、鎌倉時代から大宰府一帯を治めていた少弐（武藤）氏の城です。

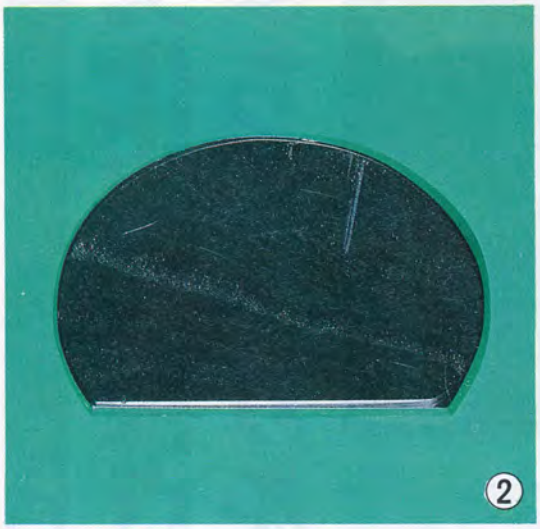
この城が歴史の表舞台に立つのは南北朝時代の建武三年（一三三六）二月のことです。後醍醐天皇らに京を追われた足利尊氏は一旦、九州に落ちて来ますが、多々良浜で宮方の菊池武敏を破り、起死回生の機を得ます。その前哨戦が有智山城を舞台とした攻防でした。尊氏の加勢に主力のほとんどが出陣し、留守部隊だけの有智山城を武敏軍が攻め落とします。『太平記』などにその様子が記載されています。

現在、谷を奥へ登っていくと、杉木立の中に土塁と空濠が現れます。土塁には一部石積も残り、空濠は二重になっています。また弓状になった土塁と濠の中央には、大手口と思われる通路が通じています。

他に土塁の前面のそこここにも石垣や人為的な造成のあとが見られ、それは九重原全体に広がっています。

このように有智山城跡は中世の山城の姿を残すものとして貴重といえましょう。

市政だより No. 515
題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです
太宰府
1993 4.1
■毎月２回／1・15日発行　■編集／福岡県太宰府市総務部企画課　TEL (092)921-2121 内線513・514


②

①

④

③

太宰府の文化財 ⑨⑤

銙帯（かたい）・石帯（せきたい）

奈良・平安時代
大宰府遺跡出土

官人が勤務時に着る服、朝服のベルトを銙帯・革帯（かく）・腰帯（よう）などといいます。牛革製のベルトで、帯飾りの材質から金銀帯、玉帯、石帯などがあります。

これらのベルトは自分の好みで着用していいのではなく、官位によって、飾りの材質や大きさが決められていました。

五位以上は金銀帯、それ以下は烏油（くろつくり）の腰帯―銅製の飾りを黒漆塗したものと規定されていました。それも平安時代になると金属質のものより石や角（つの）製（せい）のものが多くなり、着用規定も細分化したようです。

さて、太宰府関係の遺跡でも、写真のような帯飾りが二十点くらい出土しています。

写真①の白玉製品は鉈尾（だび）と呼ばれ、ベルトの先端を飾ります。白玉は三位以上しか使えない規定なので、大宰府の官人では長官の帥（そち）だけしか着用できませんでした。②は碧玉製で丸鞆（まるとも）といい、③は金銅製の巡方（ずんぼう）という飾りです。

これらがどのようにベルトを飾っていたかは、④の復原模型を参照ください。

腰帯にまで身分を規定された昔のお役人たちもなかなかつらいものがあったでしょう。

市政だより No.517
題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです

太宰府

1993 5.1

■毎月2回／1・15日発行 ■編集／福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財 ⑯

硯（すずり）

公文書が行政の基本であった奈良・平安時代、筆や硯は役人や役所にとって必需品でした。彼らは日々、多くの文書を作成し、中央に提出したり、保存用として保管したりしました。

筆や墨は現在のところ発掘例はありませんが、硯はかなり出土しています。その形から円面硯（えんめんけん）―円形で獣の足を模した脚をつけたものもある―、風字硯（ふうじけん）―「風」の字に似た形―などと呼ばれ、材質は須恵器製が多いようです。

写真①は五条の寿屋の場所から、写真②は向佐野の宮ノ本遺跡から出土しました。

①は墨をする部分に磨滅の跡があり、実際に使われたと思われます。②は実際に使用するためのものではなく、お墓に埋めるために作ったミニチュアと考えられており、大変珍しいものです。

さて、初めにも書きましたように、古代の役所では硯が必需品でした。役所には硯がある、逆にいえば硯がある所は役所の可能性が大きいということです。それで現在、発掘調査などで硯が出土すると、その遺跡は役所あるいはその関連の施設があったのではないかというふうに考えています。

①

円面硯　須恵器　22.8cm　奈良時代

②

風字硯　黒色土器　長3.8cm　平安時代

（写真提供：九州歴史資料館）

市政だより No.519
題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです

太宰府

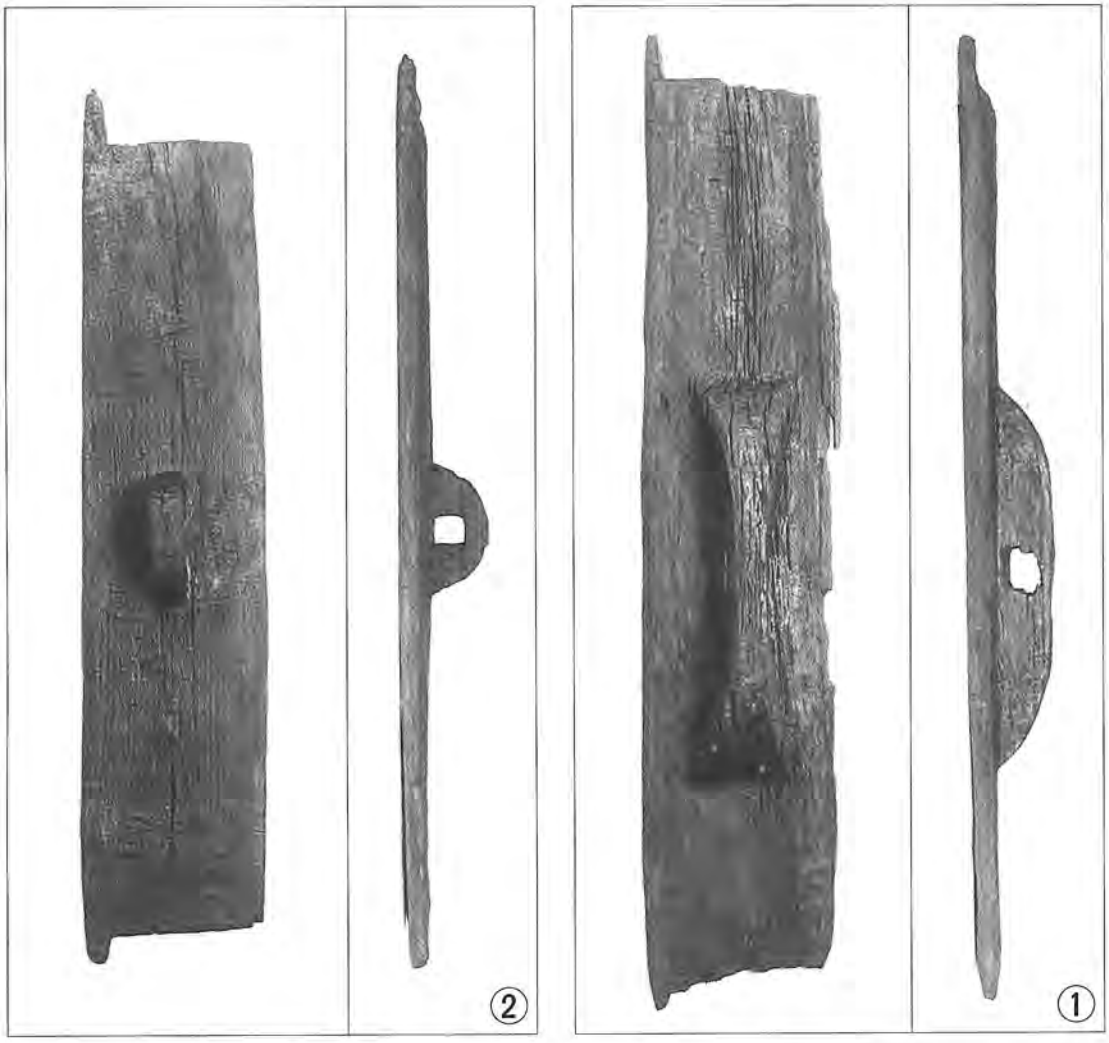
1993 6.1

■毎月２回／1・15日発行　■編集／福岡県太宰府市総務部企画課　TEL (092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財 ⑨⑦

木の扉

古墳時代　大佐野尾崎遺跡



①

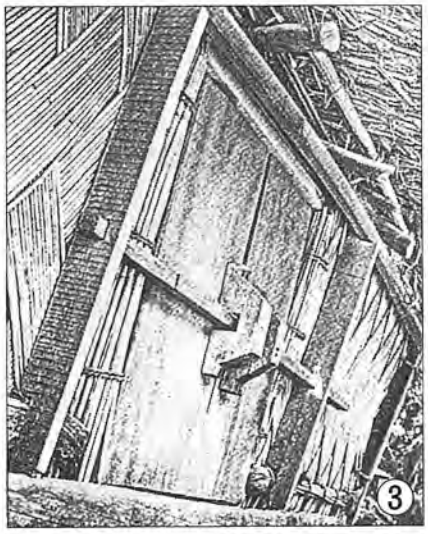
②

昭和六十二年から大佐野、向佐野地区で土地区画整理が始まりました。それに伴って各所で発掘調査が行われ、数々の興味深い発見が続いています。今回の木の扉もそれらの一つで、大佐野尾崎遺跡から出土しました。

出土した時は川岸に作られた杙状の施設の壁材に使われていましたが、元は倉庫か何かの扉の板だったようです。全部で四枚見つかり、写真①、②のように形が二種類ありました。それはすなわち同じ形のものが二枚ずつあるということで、その二枚が一組となって両開きの扉を形作っていたのではないかと考えられています。

写真③は沖縄に現存する倉庫の扉の写真ですが、尾崎遺跡で出た木の扉の使用状況を考える上で、大変参考になるものです。

これらの扉を付けた倉庫が、どこにどのように建ち並んでいたか、どんな物を入れたかなど、まだまだ検討しなければならないことは多いのですが、意匠的にもなかなか美しいデザインの閂（かんぬき）受けを持つ扉を作り、それを朽ち果てるまで、つまり扉としての役目を終えた後までも役立たせようとした昔の人々の物に対する愛情を感じます。



③

市政だより No.521
題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです

太宰府

1993 7.1

■毎月２回／1・15日発行　■編集／福岡県太宰府市総務部企画課　TEL (092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財 ⑱

成屋形遺跡

弥生時代～奈良時代　大字水城所在

高速道路の太宰府インターチェンジの近くにエーザイという薬の会社があります。この辺りの地形は、今では開発ですっかり変わってしまいましたが、もとは四王寺山から派生した小さな丘陵の先端部にあたります。そこに成屋形と呼ばれる弥生時代から奈良時代にかけての遺跡がありました。

弥生時代から古墳時代にかけては、竪穴住居、箱式石棺、方形周溝墓、円墳、前方後円墳などが作られ、奈良時代のものとしては竪穴住居が見つかっています。

写真は昭和四十三年夏の調査により出土した箱式石棺です。長さ一・七メートル余りで、内側は酸化鉄の赤い顔料が塗られていたということです。残念ながら棺の中には何も残っていませんでした。

この外、成屋形遺跡からは銅鏡二面、鉄剣、鉄鏃（矢じり）、須恵器などが出土しています。

また奈良時代の竪穴住居は、小規模なものが三棟見つかっただけですが、なかなか興味深い示唆を与えています。

奈良時代は、いわゆる大宰府政庁が置かれた時代で、水城より内側は、政庁を中心にある程度都市計画が行われ、役所や官人たちの住居が建ち並んでいたのではないかと考えられています。掘立柱の建物跡が発掘されています。

それが水城を一歩出ると、つまり成屋形などでは、人々は弥生時代から連綿と続く竪穴住居の生活という状況がほの見えてきます。

以上のような遺跡ですが、現在では写真の箱式石棺が、市の佐野文化財調査事務所の前庭に移されて保存されている外は、記録だけが残っています。

市政だより No.523
題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです

太宰府

1993 8.1

■毎月２回／1・15日発行　■編集／福岡県太宰府市総務部企画課　TEL (092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財 ⑨⑨

戒壇院の梵鐘

総高一〇四・六チセン　口径六四・八チセン
江戸時代　戒壇院蔵

戒壇院の本堂に向かって右手に、小さな建物が建っていますが、それは鐘を釣り下げるための鐘楼です。鐘楼自体も江戸時代の建物で貴重ですが、今回はその中に釣られている梵鐘についてです。

現在、鐘楼に釣られている梵鐘は、やはり江戸時代に鋳造されたもので、形は朝鮮鐘と呼ばれる形式です。お寺で一般的に目にする梵鐘―和鐘と異なった特徴がいくつかあるのに気が付くと思います。

まず、釣り手の竜頭は二頭の龍が組み合わされたものではなく、一頭だけで形造られ、背面に旗挿しまたは甬という円筒が立っています。鐘の本体―鐘身には縦横の帯―袈裟襷がなく、飛天や仏像、銘文などを鋳出します。この梵鐘も、梵字が全面に鋳出されています。そして笠形と鐘身下部には銘文も刻まれています。

銘文によると、この鐘は元禄十三年（一七〇〇）九月、福岡の白木玄流の遺言によって喜捨された財で鋳造をはじめ、翌十四年四月に完成、その後二カ月かかって銘文をたがね彫りしたということです。

鋳造したのは博多鋳物師で有名な礒野七兵衛正慶、たがね彫りは中村市左衛門安武です。

ところで梵字は、中央の大きな円相の中で蓮華に座っているのが金剛界四仏、上部の乳（突起）廓の間のは四天王、下帯は十二神将が鋳出されています。

この梵鐘は江戸時代初めの戒壇院復興の中で造られ、第二次世界大戦時の供出をまぬがれた数少ない江戸期の梵鐘としても貴重なものです。

この梵鐘は八月三日～十月十七日（月曜休館）まで、九州歴史資料館で開催される「戒壇院展」で展示されます。

市政だより No.525
題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです

太宰府

1993 9.1

■毎月２回／1・15日発行　■編集／福岡県太宰府市総務部企画課　TEL (092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財 ⑩⓪

木造文殊菩薩・弥勒菩薩立像二軀（市指定文化財）

像高　文殊菩薩二三五・五センチ　弥勒菩薩二四八・〇センチ

江戸時代　戒壇院蔵

多くの人々の善意により、戒壇院本堂の修復が進んでいますが、その本堂の本尊は盧舎那仏、そして両脇に立つ脇侍が写真の両菩薩です。

戒壇院は奈良時代に開かれますが、歳月を経て荒廃し、江戸時代の始めに現本堂が建てられるなど復興が行われ、今日に至っています。脇侍の両菩薩もこの時造られました。

右の経巻を持つ像が文殊菩薩、左、宝塔を持つのは弥勒菩薩です。両像ともお地像さんのような姿ですが、像にのこる銘文や戒壇院に伝わる『戒壇院釋迦如来脇士造立化縁之帳』から、文殊菩薩、弥勒菩薩ということが分かります。

両像は元禄十二年（一六九九）十月、京都において仏師照暁により造立され、戒壇院で漆が塗られました。そして翌十三年二月に金箔が貼られ、四月八日の釈迦誕生の日に完成したと銘が残っています。

漆を塗ったのは福岡城下職人町に住む塗師弥兵衛と十右衛門、金箔は同じく下名嶋町の長左衛門、又四郎、源兵衛の仏師父子でした。

また化縁之帳によると、水城村、観世音寺村、宰府村をはじめ近在の人々あわせて三百三十七人の喜捨により造られたことが分かります。

平成の修理も人々の浄財で行われていますが、江戸期の復興も地域の人々によって成し遂げられました。